
噛み痕/カカサク

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噛み痕／カカサク

【Nコード】

N6611A

【作者名】

深海

【あらすじ】

忍のいない世界が舞台で、赤ずきんちゃんをイメージしました。

「どこへ行くんだい？ お嬢さん」

私は出会ってしまった。
一人ぼっちの狼に。

「サクラ…お前最近よく出かけてるな。どこに行ってるんだ？」

森の中の小さな小屋に住んでいるサスケとサクラ。
最近サクラがよそよそしく、サスケが仕事から帰るといえない事もしばしばあり、サスケは不審に思っていた。
サスケが問うと、サクラは必ずこう言う。

「お母さんのところよ。具合が悪いの」

「あら…雨…」

ザアーツと雨が屋根を打つ音に気付いたサクラはカーテンを開け外を見る。

「今夜は冷えるだろうな」

「心配だわ…」

サスケの言葉など聞こえていないようで、表現を曇らせ呟くサクラにサスケは眉根を寄せた。

「…何がだ？」

「え？ あ…お母さんの事よ。家に一人きりだから…あ、私、明日朝早くにお母さんの所に行ってくるわ」

「ああ、それなら俺も行こう。しばらく会ってないしな」

「駄目よ！」

いきなり大声を上げるサクラに、サスケは目を丸くする。
サクラは慌てて笑顔を作りカーテンを閉めるとベッドに潜り込んだ。

「お母さん調子よくないの。きっと嫌がるわ…ごめんなさい。さ、もう寝よう？」

おかしい。

言葉にはしなかったが、サスケはそう思っていた。
明日は自分もサクラの母の元へ行ってみようと。

「カカシさん、カカシさん…どこにいるの？」

雨は夜のうちにあがったが、サスケの言った通りに冷えきった空気が辺りを包んでいた。
草木が雫を滴らせる中、サクラは森を進んで行く。

「ここだよ。お嬢さん」

「カカシさん！」

そこにいたのは全身雨に濡れ、寒さに震える銀色の綺麗な髪を持った青年。

サクラはカカシに駆け寄ると持ってきたタオルでカカシの顔や髪を拭いた。

「森の一人歩きは危険だよ？ 俺みたいな狼がいるんだから」

「私…カカシさんになら襲われてしまっても構わない」

そう言つてサクラはカカシを抱き締めた。
カカシの冷えきつた体にサクラの体温が染み渡る。

「お嬢さん…」

「私…カカシさんの事…」

言いかけたサクラの唇をカカシの指が押さえ、遮つた。
見つめあつた二人は自然と引き寄せられ、唇を重ねた。

コンコン――

「入りな」

「お邪魔します」

太陽が昇りきった頃、サクラの母の家を訪ねたサスケは目を見張る。サクラの母は具合が悪そうに見えず、元気に酒を飲んでいた。

「なんだい、サスケか。どうしたんだ。珍しいじゃないかアンタが来るなんて」

「あの…サクラは…」

サスケの家と変わらない小さな家。
ここにサクラがいない事など百も承知。

「サクラ？ 来てないよ。この前アンタと二人で来た時以来ね。なんかあったのかい？ あ、おい！」

サクラの母の言葉を最後まで聞かないうちに、サスケは外へ飛び出し走って行く。

「くそっ…どこにいるんだサクラ…」

「カカシさん…私カカシさんと一緒にいたい」

「駄目だよ。お嬢さんには帰る所があるんだから」

抱き合ったままの二人。

多くを語らずとも、サクラはカカシに惹かれていく。

「カカシさんと一緒にいれるなら、私は帰る所なんていない」

カカシは優しく微笑むだけで何も言っではくれず、サクラはただ離れたくないと、カカシを抱く腕に力を込めた。

「もう時間みたいだね。少ししか一緒に過ごせなかったけどとても暖かった。ありがとう」

「え？」

ドォーン……！！

轟く銃声と共に飛び上がったカカシ。
カカシが寄りかかっていた木の幹はえぐられ、木片が飛び散っていた。

「チツ…外したか…」

銃口から煙を上げる猟銃を持ったサスケは舌打ちをすると、再び木

の上にいるカカシに狙いを定めた。

「サスケ君！」

「大丈夫かサクラ！　そこから離れるんだ！」

サクラは立ち上がると木の上にいるカカシには到底届かないが、かばうように両手を広げた。

「サクラ何をしてる！」

「やめて！　カカシさんは悪い人じゃないわ！　嘘をついて家を出た事は謝るからこの人を撃たないで！」

「人…？　何を言ってるんだ？　いいから離れろ！　噛み殺されるぞ！」

サクラの言葉に怪訝そうに言うサスケ。
目を細めるとゆっくりと引き金に手をかける。

「やめてー!」

ドォーン……!

二回目の銃声。

弾は真っ直ぐにカカシへ向かっていったが、カカシは体を捻り易々と避けて見せた。

「お嬢さん……」

「カ…カシ…さん…?」

呼ばれ木の上を見上げたサクラの表情が恐ばる。

そこにいたのは今まで一緒にいたカカシではなく、カカシの髪と同じ色の毛皮を纏った銀色の獣。

「騙してごめんよ、お嬢さん。ただ…温もりが欲しかったんだ。俺みたいな狼がいるからもう森の一人歩きは駄目だよ? さよならお嬢さん」

険しい顔付きとは違い優しく響くカカシの声。

「ウオオオオン…」

カカシは一度悲しげな鳴き声を上げると、木から飛び下りあつと言
う間に姿をくらませた。

私が出会った一人ぼっちの狼。

温もりを求めた寂しい狼は私の心に噛み痕を残した。

今日もあなたは温もりを求めて森をさ迷うの？

ウオオオオン…

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6611a/>

噛み痕/カカサク

2010年10月13日05時37分発行